
狼新聞

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼新聞

【Nコード】

N6018Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

虚報を意図的に載せそれで国民を自分達の思うように動かすことを考えていた新聞があった。だがその嘘が暴かれていき。残念ながら実話系のお話です。どの新聞がモデルかはお話を読んで下さればわかる方はわかると思います。

第一章

狼新聞

新聞社である。しかしであった。

この新聞は新聞を売ることよりもだ。それを利用することだけを考えていた。

社長がだ。自らこう言った。

「いいか、まずはだ」

「はい」

「あれですね」

「そうだ、あれだ」

こう言ってからだった。

「あれを仕掛けるぞ」

「わかりました、それでは」

「この記事については」

「ついてはではないな」

社長はにやりと笑って言った。

「この記事もだな」

「ははは、言われてみればそうですね」

「確かに」

部下は皆社長のその言葉に笑った。そうしてだった。

ある記事が新聞に掲載された。何とサンゴ礁に落書きがしてある。環境破壊を告発する記事だ。

皆それを見て怒った。美しいサンゴ礁にこんなことをする人間がいるのかと。ダイバーやら現地の漁師やらが目の敵にされ新聞のきじは売れ社会に警鐘を鳴らす『良識派』の地位を確固たるものにさせた。しかしであった。

ある頭のいい人物がだ。事実を検証してだ。こう言い出したのだ。った。

「あれはあの新聞社の自作自演じゃないのか？」

こう主張したのである。

「あの時あそこにはシーズンじゃないからダイバーはいなかったし
現地の漁師の人もいなかった筈だ」

「えっ、けれど」

「それでも」

「しかも」

この人物の指摘はさらに続いた。

「その日あの新聞社の記者がわざわざ水中カメラと何か棒みたいな
ものを持って潜るのを見た人がいるし」

「えっ、それは本当なのか？」

「ひよっとして」

「本當みたいだよ。実際に現地にあの新聞社の記者が入ってるし」

彼の検証はここまで行き届いていた。するとであった。

これまでの環境破壊への怒りは新聞社への疑念に変わっていった。
そうしてであった。

疑いを持った者達はさらに検証を続けていく。するとであった。
サンゴ礁を傷つけた者はその新聞社の記者その人だとわかったのだ
った。

真実がわかったその時にだ。これまでの環境破壊への怒りは新聞
社の怒りに変わった。皆激怒して新聞社を糾弾した。

「ふざけるな！」

「御前等がやったんだろうが！」

「それをダイバーや現地の人達のせいにするな！」

「そつだ！責任取れ！」

こうした非難と糾弾の声が沸き起こった。しかしであった。

それに対してだ。新聞社はだ。まず記事を捏造した記者を免職に
して蜥蜴の尻尾切りをしてからだ。社長が謝罪した。

その謝罪は凄いいものだった。手を後ろに組んで出て来てイスに深
々と座つてだ。そのうえでの謝罪だった。

皆これに啞然とした。だがこの話はこれで終わらせた。ところがであつた。

この新聞社はまたやったのだ。またしてもだつた。

過去の戦争である軍人が百人斬りをしたと報道した。しかもこれは敵軍の将兵を斬った話の筈が何故か捕虜や一般市民を虐殺した話になつた。

しかもその他にも過去の写真が何故か略奪や蛮行の証拠写真になつた。何故か異なる写真で殺されている同一人物がいてもだ。そうした明らかにおかしな写真まで虐殺の証拠写真とされていった。

この百人斬りの軍人の遺族はこれにより家庭が崩壊してしまつた。あまりのことだ。またある人物が検証をはじめたのであつた。

今度はだ。日本刀の話だつた。

「日本刀は一度の戦闘で百人も斬れない」

この事実から話された。

「それで何で百人斬りができるんだ？」

「そつえばそうだよな」

「しかも作戦を指揮しながら？」

「将校だからそうなる筈なのに」

「一体どんな軍人なんだ」

調べれば調べる程おかしい話だ。そしてだ。

常識から考えて到底有り得ない話という結論に至つた。何しろ最後の最後に兜割りまでしているのだ。戦場を戦いながら百人斬りを競いそのうえで剣術の奥義まで出したのだ。剣術を知る者は言つた。

「この軍人は恐ろしい達人だ。事実ならば」

こつ言つたのである。

「事実とは絶対に思えない」

「そうだよな。荒木又右衛門で三十六人だけれどな」

「あれも創作だしな」

「時代劇とかじゃ刀で突いてるな」

「ああ、そうしてるな」

かなり昔のリアルな時代劇の映像を見ての話だ。

第二章

「じゃあやつぱりあの記事は」

「嘘だな」

「ああ、捏造だな」

こうした結論になった。そうしてだ。

他の掲載された写真や記事も検証されていく。すると何もかもがであつた。

「おい、これ意図的にやつてるよな」

「ああ、これ我が国の文化にないしな」

「つていうかあつちの国の文化の殺し方だよな」

「人間を食う？そんなことが何であるんだ？」

これまた考えれば考える程おかしいことであつた。それを検証していくとだ。また言われた。

「またやつたな」

「ああ、やつたな」

「捏造だな」

「またか」

これが再び糾弾になった。ところがこの一連の記事を作成した記者は居直るだけだつた。それどころか騙したか最初から加担している人間に囲まれてだ。同じ主張を続ける始末だつた。

このことに多くの者が怒り狂つたがどうにもならなかつた。嘘は明らかになつたがそれでもだつた。新聞社の力は健在であつた。

しかもだ。彼等はだ。またしてもやつたのだつた。

今度は軍が占領地の人間を拉致して娼婦にしたという。今度は外交問題にまで発展した。

その当時の占領地の国民が怒り狂つた。ある学者が出してきたというその徴用の証拠となる官文書が出て来た。それがであつた。

新聞の一面に出た。これまた大騒ぎになつた。

「軍がそんなことをやっていたのか」

「とんでもない話だな」

「十三歳の女の子まで娼婦にした!？」

「どんな軍隊なんだ」

またしても糾弾の話になっていく。

しかもである。これで国の威信は落ちた。そうした騒動によつてだ。新聞社は積極的に旗振りをして煽動を行つたのである。

だがこのことにしてもだ。おかしいと思う者がいた。まずはだ。

「あの時代は公娼制度がなかったか？」

「あつ、そういえば」

「そうだよな」

「占領地から強制的に徴用する必要があつたのか？」

皆このことに気付いた。

「じゃあこれって」

「またか？」

「まさか」

この新聞社を知る者はいい加減わかつていた。それで、であつた。検証してみた。するとだ。

記事にあつた占領地で聞き込み調査をするとだつた。

「そんなことはありませんでした」

「そんなことがあれば大騒ぎですよ」

こつした返事ばかりであつた。

「というか何でこんな話が出て来たんですか？」

「一体全体」

「それがわからないんですが」

逆にこつ尋ね返される始末であつた。つまりそんなことはこの場所ではなかったということであつた。しかもだ。調べれば調べる程だつた。

「んっ？あの人の言つてることつて」

「そうだよな。食い違つてるよな」

「その都度な」

名乗り出てきた娼婦だった老婆達の主張を検証してみてもおかしなことに気付いたのである。

「経歴や出身地違ってるよな」

「それも何度もな」

「娼婦になつた経緯もな」

「生年までな」

とにかく何から何まで食い違っていたのだ。

「普通人間生年まで間違えないだろ」

「言ってることに信憑性ないな」

「ああ、全くな」

こう結論が出た。

「ありや嘘だな」

「おい、結局何処でも軍が人攫いなんてしていなかったぞ」

この証拠も出て来た。

「あの官文書だってよく見たらそうした悪質な業者が出ているから軍が取り締まるようになっていう話だったしな」

「それが何で軍が人攫いしてたって証拠になるんだ？」

「これって印象操作だよな、軍が関与していたっていうことを逆手にとって」

「つまりだ」

ここでまた結論が出た。

「嘘だったってことだな」

「ああ、そうなるな」

「嘘だったんだな」

「また、な」

「またやりやがったなああの新聞」

そして今度も嘘が暴かれたのであった。

その結果だ。この件でも新聞社に批判が集中した。しかしである。新聞社はてんとして恥じずだ。一面で居丈高にこう書いたのだあ

った。

「歴史は塗り替えられない」

その娼婦についても完全に居直りだった。知っている者はこの破廉恥さに誰もが呆れ、そして怒った。批判が殺到したのだった。

第三章

だが新聞社は反省せずだ。謝罪も何もしなかった。こうしたことが続いた。

そしてその結果だ。ネットが普及してだ。この新聞社のことが皆に知れ渡るようになった。

「何だ？あの新聞そんなことばかりやっていったのか」

「それも戦前からか」

「ほお、あのテロ国家とグルだったんか」

「普通の会社なら倒産してるな」

「何で報道資格剥奪されないんだ？」

多くの者が悪事を知るようになった。その結果。

発行部数は暴落していった。それはもう止められなかった。

社長はこれに焦ってだ。社員達に打開策を出すように命じた。

「とにかく何とかしろ」

しかしであった。その返答は。

「いえ、それがです」

「もうどうにもなりません」

「歯止めが利きません」

「このままでは」

出て来るのはこうした絶望的な言葉だけであった。

「我が社は倒産です」

「既に赤字収益になっていますし」

「誰も読まなくなってきました」

「馬鹿な、誰もか」

社長はその現実を聞いて愕然となった。

「誰も読まなくなっているのか」

「はい、そうです」

「過去のことが知れ渡りそれで」

「最早」

「くっ、それならだ」

今度はネットを攻撃しはじめた。政府に規制を訴えたりもしていた。だがそれがかえってだ。彼等の首を絞めることになってしまった。

ネットはだ。一斉に反撃を加えた。

「おいおい、言論弾圧か？」

「言論の自由を標榜してそれか」

「何処の独裁国家だよ」

「まああの新聞は独裁大好きだしな」

「ファシズムってことだな」

こう冷笑されてだ。その言論弾圧体質までもがネットに知れ渡った。携帯でのネットからもこのことが知られてだ。批判の声はさらに高まった。

その結果だ。発行部数はさらに落ちてだ。赤字もどんどん膨らんでいった。その結果。

遂にであった。倒産してしまった。社長はだ。

倒産したその日にだ。社長室で言った。

「何故だ、何故こうなった」

「わかりません」

「私にもです」

社員達も呆然となっている。まだ社長室は豪勢なままである。しかしだった。倒産したその現実が彼等を打ち据えていたのである。

そのことにどうしようもないままだ。社長は言った。

「ツケか………」

「ツケ」

「ツケといえますと」

「報いか」

今度はこう言ったのであった。

「これは」

「報いですか」

「それなのですか」

「そうだ、それだ」

こう己の前に立つ社員達に話した。その顔からは生気が消えて目は虚ろである。完全に死んだ者の目になってしまっていた。

「嘘を書き捏造を垂れ流してきたな」

「つまりです」

ここで社員の一人が言った。

「我々は狼少年だったのですね」

「そうだ。狼が来ると嘘を言い続けていてだ」

社長は己の席で項垂れたまま話した。

「その結果誰からも信用されなくなりだ」

「そのうえで狼に自分の羊を全て食べられた」

「その狼少年だったのですね」

「そうだったのだ。だからこうなったのだ」

社長は力のない声で言った。

「我々は狼少年だったのだ」

今それがようやくわかったのだ。だが全てはもう終わってしまった。この新聞社は歴史に永遠に名を残すことになった。狼新聞として。それは事実であった。

狼新聞

完

2010・9・24

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6018q/>

狼新聞

2011年2月2日22時25分発行